823
M8K5

湖月抄

若菜下

38

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

藤裏葉 細 巻之名以テ詞ヲ号ス也 河 はるひさすふぢのうら葉のうらとけてきみしおもはゞ我もたのまむ

花 源卅九歳三月より十二月までのことみえたり

梅がえの同年のつゞき

御いそぎのほどにも 孟 明石

姫君東宮へ参給ふ御いそぎの事 花 同

ほれ\/しく 細 夕霧

心のうちなる事をかくおもふ

こゝろは夕霧の心也 内大臣退

居給てゆかしきことを内大臣

と同じく内大臣の方よりゆるされざるを

おもひ給ふ

関守の 師 いふも秘

ぬべき也 姫君の事を

夕霧よりおもふやうに

河 人のゆるしなき也

秘事也

どんなことかもみえぬ

細 雲井がりの事に内大臣の

のおもひしる事を思ひて

孟 雲井のことを内大臣の中

務などの [illegible] 夕霧

へおもひを

孟 雲居の事を

師 夕霧ハ内大臣の事

をおもひて雲井

八中務宮の事を思ひ給ふ

御いそぎの程にも・宰相の中将はながめがちにて（細 雲井雁の事を思ひ給ふ）（孟 夕霧の雲井雁を思ひ給ふ）ほれ\/しき心ちするを・かつはあやしく我心ながら・しふねきぞかし・あながちにかく思ふことならば・関守の（孟 夕霧の心也）うちもねぬべきけしきに思ひよわり給ふなるをきゝながら・同じくは人わろからぬさまに見はてんと念ずるも・くるしう思ひみだれ給ふ・女君もおとゞのかすめ給ひし事のすぢを・もしさもあらば・何のなごりかはと・なげかしうて・あやしくそむき\/にさすがなる御もろこひなり・（花 内大臣）（河 内大臣の）（孟 夕霧を思ひ給ふ）おとゞもさこそ心づよがり給ひしかど・（たけからぬ）

ことさらものはかりつらこひ　抄　そむきこゝろかくろふひよ　ゆふきこゝろあれはこそ

人のまかもらうしく
抄 又ゆしかそ雲井居へかし
くらゐん人夕霧みすく對
してさうつてるみかそ
とし思案すうくあつて雲
井へきこふ人のすかもと
の心得

くえつれてゝて 詞 細 内大臣
と夕霧とに釈肥みうう
此根と（へあるし）抄 上八句
ともあつて下に此根を
まうるしと

しかぬよはかりしらずひとく。のこゝろやみもさや　細 中務宮の夕霧と見え
（世よりかくれしこと）
うほそくらちそ給はば。えらくわたるわ　抄 雲井居に別人とひとこと
（らんるとよつて）
えひくつしりん給ども。人のさかもらうしそ。
細 夕霧を門にて八雲井居の心悪かるべしと
わかれかさ心もんにしくられは。そのつらう
抄 さやうやうとでけてよりべきこと
りかくまさにしらやかうしらん。志のふるれど。　細 おほ夕霧密通のこと
しらくのこしおやまりとせよりみそる
細 内大臣の心
べじらくまきうつて。れきけおくべきさみあ
孟 不用との心也 抄曰
つとえしるかりねらんいつれおすてらうしこと
けぬほ本うれいゆくりるくいひらしんとへいて
雑子多くけうらと夕霧へいろ〳〵も有
と覚しりくうまそてことえくきりてをさ
（とりら）
んも。ひとのおもんそこなとをあそりいふゝる

三月廿日　細 公閑忠仁三条
大宮の忌月はや月よりあり
給へき事ありてかくあり
極楽寺　細 此海よりて
よりて代々摂家の墓
所也。古く深草山のけ
うらうまよりてを待る
を此所也。只今内大臣
此所へ参りくる給ふ也　紀事
向昭宣公為二巌上童之一
時深草天皇行幸芹河之
之時従りれよ殿極楽
昭宣公に表進してさきの
り奉二勅命一則三寶に
祈請して表以し而乃寺以一
伽藍を建立せしと記
力なるかりしで求めおて
られを献らんぞ故昭宣
公果進を極めて池日の
祈念を果すへからん極楽
るとよそまつらく　暑紀
此中とへ　細 雲井居乃
まおよ夕霧の心折とけ
さうくう

つくしてゝいかのめらえべきさまかと恥かれけり。
三月廿日大宮の御きにちにて
極楽寺にまうで給へり。きんだちみなひきつれ
つれいきほひあらまほしく上達めなども
あまたまゐりつどひ給へるに。宰相の中将をさ　孟 夕霧也
をさけはひおとらず。よそほしくて。かたち
どもたゞいまのさかりにねびゆきて何事もとゝのひて
とりあつめてめでたき人のけしきをまかせき
のみぞおぼゆる。大臣も此君をつらしと見え
なりしもそのかみに思ひなされて。いとゞいみじくあへ
いとらきてちぐもしてまつもつかひいへね
細 足をゆかせてさへさらなり
孟 御誦経二一上済てしむて
よりはめでたく給へず。御誦経などもてなし給ふ

あまけあるへく 師 花の陰
のこりがたきをとゞまれ
をしとおぼしめしの給を
ちりみだれし
なとゝこめぬきよ 細 夕霧の
おもひいれる事色をを
しりめまふし 師 夕霧の
気色ひおもしろしきこして
内府の心とゝめてみ給ふ 細 祖母の御
なふのはのり
ことを思ひ給はず我と

雲井雁のことゝなり
此大臣の心よりいでたまへる
ふしぎなれとし
こゝにもきたりひけ
細 大臣の御ことば何事とも大
臣を我にいづこ中との
おもひ出し 盃 大臣の
内進にあかも内大臣と崇
因ゆへよりしのおもひしと
こゝろありてしさ
細 心あはたゝしとあるに
しく後のおもふゆへおに
げありとこそ家うそて
くそり等後に用ゐて
畢 人々このゆきのむかう
きせりよりまた風にも
になりあれなる細し 盃日

もせさせ給へり。宰相の君はましてよろ
づをとりもちてあはれにいとなみつかう（細 祖母の御忌日なれば也）
まつり給ふ。夕かけてみなかへり給ふほど花はみな（次）
ちりみだれ霞たど〳〵しきにおとゞむかしを
しおぼしいでゝなまめかしううそぶきなが
め給ふ。宰相もあはれなるゆふべのけしきに（夕）
いとゞうちしめりて、あまけありと人〳〵の（抄 夕霧の此事をみて内大臣の御心をとられたるなるべし）
さはぐにもなをながめいりてゐ給へり。（盃 内府の夕霧の御けしき）
心ときめきに見給ふことやありけん。袖をひ（書をえ給ひし）（夕霧の袖を内府）
きよせて、などかいとこよなくはかうじ給へる。（細 内大臣の詞也）（の引て）（盃 勘當之）
けふの御法の縁をも尋ておぼさばつみゆるし（法會）
給ひてよや。のこりすくなく（内府の我身すくなきをいへり）
なりゆくすゑの世に思ひすてたまへるも
うらみきこゆべくなんとのたまへば、うちかし（細 夕霧の詞）
こまりて、すぎにし御おもむけも、たのみきこえ
さすべきさまにうけ給はりおく事侍りしかど、ゆるし（盃 雲井雁の事を内府より出給へとの事也）
なき御けしきに、はゞかりつゝなんときこえ給ふ。
心あはたゝしき雨風にみなほろ〳〵とちり
給ひぬ。君いかにおもひて、例ならず（細 夕霧の内大臣の心をはかりかねて思ひ給ふ也）
けしきばみ給ひつらんなど、世とゝもに
心をかけたる御あたりなれば、はかなきこ（晩 世とともに 盃 常に）
となれど耳とまりて、とやかくやと思ひ（位なり）
あかし給ふ。こゝらの年ごろのおもひのしるしにや（抄 夕霧の年来ね念じ給ふ）

られけり程のいとくちをしきを
まさる 師 若菜へとりなして
夕霧なと申なとよ
あり

我中の若菜の文こと 細 [illegible]

孟 雲井のかりと申しつべき人と云給く
のけしきもおぼろけならず見えしよ
ける事ついでのわざとはなくさらずがな
細 廿七日に始上
つくしくらんとおほしくて日月のつもらさ
旬の内とはと 朱雀院大臣の庭おほえ
らうがはしき人の春の花のいとおほし
さるゝれてよのつねのさまならずに
こともみえんことおしきことさのみあそび
おもしろきて書もの程のいかゞくおぼえに
柏木して申しけり夕霧へ消息
乱中将しておまへたる事あり一日の御わたり 孟 式部の卿の宮 細 按察大納言
てのまゐり
けしきかゝり對面あかれでかへりし給ひにし
海あらがへすらうて給ふらんやとおぼすに
をみは
柱
かくて右の若宮も来てさむるなどゝ
仲 若の事こまかにあらはしたる
やはらかなる御ありさまのとけよいと明らかにおぼえ
おもしろき 孟 夕霧のかくまされはこそ
校よつけまゐりまらうけあるもころと
しころまて
さめきをしれてりことまうでて給
夕
あまくよおりやまさりんからのむねそ
夕霧の御心
れいさのあやしくいと恋しくてうち
孟 憶し
ゆかしくそおろまゝなれとりあやしきの人
細 殿中将御心 波代可申と
うしろく給 なほとまてとよろこひの
孟 柏木と夕の物のあふ
らうしさをいかんそいふくてくし給 細 夕霧の御心
と源へとせさりまふさ
のおまへわたくわふるんとそ成らんさきそ給
細 源の宮雲井の存の子なりへしと
ひゐやうあそひ抱しあへあまりやおほんさとし
そことまの給そくしそはずさおもしるく
のけうなりしうこともらけめとる給

孟 式部の卿の宮 細 式部卿宮
あくまて 細 朱文字雲
しおの花八内大臣御覧
ゆりしうら花よいとまそ
八まかし八す海しこそ
あさうぞうくかめかるく思
しまへはうかうてゆりく
孟 名の
ままいわへさしく
孟 宿の山の中りまの事を撰
といかこするんの御 明日
うちゆしくてそ 細 夕霧の
勝して所それとる物ぞみあり
おうしくせうそろへ行なる
なとして上き 孟 柏木
ようしく御てえ合せあれ
まし夕の花まし
きとすくみゆりの
おあまことりまうに
まけても物くとのこまかひ
てしそおまふ藁引あまりし

根ざしおぼめくと源の仰らるゝ
也みしをこのなりあらはし
あらしたりし女君はみなしらぬはゆゑ
の巻あらはしゝことは八の宮つゝまく

師 内府の雲井居と夕霧をゆるしたまはざりしは大臣への不孝也ゆゑにかくいへるといひて也おほしたる
けんかとうかゝてよたちうねたげなり。きしもを佐う 細 夕霧の詞也
まそこそ司まうれう じあいのまへのうらつらもあるはいも面白く咲て
倚たるを。志けりろうかりひえうれば。あそび 細 源詞也 師 候ところ
らん為しうや停しんとか給げぞとつゝむ
れしあつうとまうやうりの。ふあの人へとゆるし給はい
細 夕霧の心也 うかなるとおぼしく
りかりんとふさとよいうりしくと なうぼん
細 源の詞 そしてそあまりこくてうろひすあれ桃源 ひさえざ
のおびなするてうさのとの人へてふさあいいよ 孟 源の直衣を夕へまいらせし
けりのさつてうかんやそで。けがれうのむと
とるると見えなりしぬ御そしもくしてゆうとと

すそしそあそうらく
いろびあれ 細 三位の
中納言の程こそあれども
え二あひの義ゝもえん似
合ぶらぬ。花 直衣の
襲は表うき時二藍にて
さゝ花田にまあさき花
田へ推参職は二位と位等
じあかねを云内大臣は時
は宰相中納言推参儀にて
あさぎに二藍はあまりよ
きらくしくれれどもさむ
田まりうへしとのさまで

まいりきてなれ給。ゆが御方まできりろ 孟 夕の方へ
づゝひいうごくけるうしてしみ。かゝりしも 孟 夕のとりてつるを、かゝりて
ぎんやわしき御しるよまゝしてまつり。おとゞ 孟 内大臣の
のえぞよん中ねとてうしめて。七八人うられ 孟 子姪 頭中将を始として 細 次中将也
てひとぐいれまりいいづれとも。すくかゝしうら
まうとさるれどもひとよまされてあ 細 夕霧なく
ざやくよきうしるる拍ゝしちなうしうか
つさひづくけるうかゝく おれしひさつくるれ 孟 府君也
をとあしし給れよういなるかるす。読かう 孟 内大臣の
わるまるしあて。出給ひてふの方にかまうかき 装束して
岩房ろどよのぞきてとみへいとうつさく 孟 内府の詞也
よねびまさる人なり。ようかいるじけと忠う

とりそへり
抄 源のさやうにありしハ若く中将にてそばへらるまひし人なれど也 一段世の人ゝハ源氏よるなひきめでなどもされいとつぞうしき

かに物ゝしや。あざやかにぬけいでおよすけ
たるかたハちゝおとゞにもまさりざまにこ
孟 夕霧の源にまさりたること
そあめれ。かれハたゞいとせちになまめか
細 源也
しうあいぎやうづきて。見るにゑましく。世中
わするゝ心ちぞし給ふ。おほやけざまハすこし
たはれてあざれたるかたなりし。ことハり
細 しどけなきやう也
ぞかし。これハざえのきハもまさり。心もちゐを
夕霧をのたまふ也
孟 学文なども源にまさりたる事也
ゝしくすくよかにたらひた
河 雄々
りと世におぼえためりなどの
のたまひてぞたいめんし給ふ。ものまめやかに
孟 実々しき物語この時宜しからず 新ハおかしき藤などを賞する也
むべゝゝしき御物語ハすこしばかりにて
花のけうにうつり給ひぬ。春の花いづれと
哢 内大臣詞 孟なとと評せる詞也

藤まさらぬほど
河 藤ハ三月に咲かゝりたれ
春の花ちりはてゝのちにも
ひらく花

月ハさし出ぬれど
細 あるハ四月一日とあり
と河内に侍るの河海
ありされど見ハ七日く
まよみくらゝ一日比と
みる面白きと

なくみなひらけいづる色ごとにめおどろかぬ
ハなきを。心みじかくうちすてゝちり
孟 花の心みじかくちるをいふ
ぬるがうらめしうおぼゆるころほひ。
この花のひとりたちおくれて。夏にさき
細 藤を評しての言也
かゝるほどなんあやしう心にくゝあはれ
哢 藤をもめでさせ給ふ心にて夕霧をほめて
におぼえ侍る。色もはたなつかしきゆ
かりにしつべしとてうちほゝゑみ給へる
河 紫のゆかりの事也 紫と女とによせて
哢 内大臣のまことの心をよせ
けしきありてにほひきよげなり。月ハさし
孟 月さし出ぬる
出ぬれど。花の色さだかにも見えぬほどなる
を。もてあそぶに心をよせて。大みき
まゐり。御あそびなどし給ふ。おとゞほどなく
細 夕霧に酒まゐる
内大臣也
そらゑひをし給ひて。みだりがはしく

文籍にも家礼 孟 もんじやく
ともしんへしまうくの意情之
其注しるし 細 家礼 より
みえず。和俗之文字の礼
を作人にかも用らるゝあれ
ば我身が男と見ゆれど
しろともしとうらうべき
とし 弄 文籍ハ史記とて
ましいへり。高祖紀云、六
年高祖五日一朝太公如
家人父子礼。太公家令
説太公曰、天無二日、土無
二王、今高祖雖子、人主
也。太公雖父、人臣也
和家礼といふハ子の父を
うやまふことを家人にたれど

ゑはし給ふを。さる心していたうすまひ
なやめり。君はすゑの世にはあまるまで
あめのしたのいうそくにものし給ふめるをよ
はひふりぬる人思ひすて給ふなんつら
かりける。文籍にも家礼といふことある
べくや。なにがしのをしへもよく思ししる
らんと思ひ給ふるを。いたう心なやまし給ふと
うらみきこゆべくなんなどのたまひて
やをかしきほどに
いかでかなき人の御かはりには身をすつる
さまにもとこそ思ひ給へしり侍るを
いかにおぼしなすにかはべらん

細 夕霧に対して御敬あること
細 内大臣詞 抄 夕霧をさしていふこと
細 親等をと推量あること
孟 りんあう
儒の道とも夕霧によくあること
抄 内大臣の詞也
細 夕霧の詞也

とするに准して礼とすることを今の世にも家礼といひきたれり。略記曰 文籍
家礼とハげんせきれいとしもいとたやくしもらいはとももしぢんべきなり一説文せきまで
あちかしの礼しく 細 家礼の義未詳也。家礼とハ只儒道のみとぞあるなり
ゆゑ心なやまし 細 内大臣の我心をなやまし給ふと恨むなり
給ふとうらみきこえ 細 故致仕の大臣大養上にて我がゆかりとぞ只夕霧を挑ふ
かくべしとて
よくしりとうろかなう
孟 夕霧の卑下也 抄 源氏
君を落給ふまゝのやう
よ他のしいへもとよ
夕霧の心此やうなるを
こしりなるべしと謝し
なり詞也
うちずんじて 花いそがし
きらし人をとりてあまりて
とてもむくやしきるを
飛夕霧を饗応し給ふ
藤のうらはの 細 内大臣詞
三光自筆 同三云 日さす藤
のうらはのうらとけて
君しおもはゞ我もたのま
ん 孟 そのまゝ花をとりて
なり紙もとこそ 御詞
とりて巻名とせり

ところ〴〵のなごりまでこそとか
こまりきこえ給ふ。御ときよくさうどきて藤
のうらばのとうちずんじ給へる。御けしきを
給はりて。頭中将花の色こくことに
ふさながきを折りて、まらうどの御盃にくは
ふ。とりてもてなやむに、おとゞ
むらさきにかことはかけん藤の花
まつよりすぎてうれたけれども。宰相さかづきを
とりて。けしきばかりはいしたてまつり

細 内大臣の時宜よき也
うらとけて
お 内大臣の気色
孟 柏木
孟 夕霧の事也
細 夕霧の事也
致仕大臣
夕
細 礼としてあつかふ

ひかさゝま　細　雲井居のうをおめのすゝすみなり。女を筆によそへたり。杉より

咲をまつをまつるとくといふなり。杉を待よとせしなり。杉むすめの教なりぬなりて

秋筋の狂かうまくしおつらしらんハ雲井居にゆかりんとしてそらくさりすまその

あかんを扣つるよ。さまあがりしん然ハ年によるなうく雲井居とさりてなるへ

いそれまゆかりて恨をもめくさうしくおに誦しきる方も思しぬりて紙も秋まんと

のふみまのまつり。此筆をんよりなくり　花天盃を経てハ夜に出りて秋葉すること。是ハいやしきつる

みしさつりたりんし筆結

里消もうふ男衆礼ざおしくんすし

豊かり　細　あまとのま

どき立つらしく。花の網てく

とハ今日のくらし繼宣新

まいくたり咲ちるむをを

立しつくねこひらしを春

にあふらんのくらし　名寄

さそやめの袖に　同 婦人 日本紀

手弱女人日 知婦 多ヤ 万葉

細 竟も雲井居にあひをを

へしそらお夕霧お雲

井居の威光もまさ 人

とのあを授し

まんふうり 花 巡流し 細 誦 きぐん

ド 流 るうくしよ義まこと云く

當氣の順る海に誦し

あふぎ海いとゝあり

西 夕寄 いくうつり露けさをまとひて花

のひもとくかりよおもへ頭中将へ 書き

柏木 こそやめの袖よまりくる夜の色ひ

ひとりやみもまてらんつまくるまされ

あそむる我が思れど思ひのますれり

くらかしてされどもかりまそ七 まではよ

日の夕月夜りけ池のるるり。池のりを

かり順をつ月く

これよりまさしれ 師 筆冬の例し此方かりまさしぬ　よそより

七日の夕月夜　細 四月七日の中宮御くるまそうり。朝の此とよそろハ上旬此と云朝へし

のそくるみすくれたかけにあそ 細御名しも

あかまいふ御出ろし 松本さりるうこまをとるもの

あかまず思ごとものかうくきさころま

いとゝいうらうしきばくことされそう松の

木ぶりさ例どもハおくるようくれる花の 本し

海よのつるうしにかりしら例の舟れ 書きしこんへ

かねしゝ思いとまうしくしておしきとる

ふぬくいとけやけうもつらうまうるを 検仕し 同 名節 常磐 文選 和てきあんなうと内府の只のことに

折ふされまてとしつまけろとの家のそう

らくえん見まかれてえいてしおりうかうりそ

さ涼じよそかうえしぬれめそひかれく

かくさき　細　河海にある

せり。今こふんハ夕霧の

こくより女の手を歌に

しぶ拾によりおして

ならふかし 同 芦垣信系

おかさかすがきかなけ

てもふころもとかひきをと

まれ一段てふるそとされ

このす事とゝ書くのまうよ

こうそんし二段とぐろゝ

此家のとこゝあなやよ

あるはうしろ七七三限下畧花芳頃の事ハ男のこゝろにて女をしたひて家の道とこゝ
ていはゞ□ヽ女の叙に若る人あり。さしあたりて告つる人といふなるを下畧
師此説の□□にて□□といへるも此方の人をいふにや。夕貌の此方の人をさしていへるを
とるまじく内府の中にけしきあるの付さまに夕貌が中やよりてよき□□をとしいへる
まへにある此家の　細　花香ところをも見立て能く辰轉書写の摂くしろといへる
と見えてこゝひまふなる人し。今夜云の席るれいふなる□けあらんといへるぞ
すみちを弁おねらてと見立とりすくまのこゝろにふべきよし此則して内衣の色をよく
ゑへてうつらひ見えるあるなし。ゆかりの見えすくぞいひ□けるものと見ゆ
漢字にて此例此則し。又孟子あどにれ。毛詩の詩。尚書の詞などにもみあらひかゆかく
がひて文字をみそとしおもくねさまよりみえてうたうなくぞゆかし
此字の摂とへるべうしれ　孟　信る事よしろくかるは表へより家へ文字いふべきく
とさうんとそて此ちの詞をそえて後云に葉へよしくとらか将く
　　お甘比のうくくるにひのめらくて見てあるしく
　　　　細夕貌之　孟　夕貌の宿御に将く
ゆく猪よ此やさ花るもかく　　夕貌の詞
ちいくしへづりてかそれば　□も初てく
くらきはかなべうれ余る前ゆかり独てんや
　　孟付にこそ又夕の宿中の人への詞く
　　細此く以中ねとさしての
とかねまくらいへ猪此くわみんやれやさらさ
ずかりくわよ此さゐいくとひすくそしをくい
　　　　　　　　　　　　孟　此句
ねらくしうしを信之れ
花散らくしさところ
今やあもとらけるや
どうよ道の花も此ろ
しりべきりよ宮ね中
ねさうくむうさ胡に宮
さいへく今をしてなり
てに見るく　畧記
はやきしおめしやよ　孟　言此
　　　　　　　　　　　　　　　　
房をゆきんしょのもし翁
と称すをと内府の此すさ
松よ此れ　　細　西行の竺在
芸く六帖　寺院ある梅
哭花る叙うれども称
此をぞ花ハ咲ける。師松
よ哭花るいふ弁の残り
かきわらんと□ゆかしや
とハ花の陰の狭ね今ど
めぐくしくいへまさまに
とゆきてゆくしやてく
わうさのまさや　細　孫ねハ
我方の貢あらうと称さ
くそひまなく
いつうぞ　　三　いつうう
なりつきりしつくの方にぞ
見えくの前さ自称の□や
松よ淘人の中け見る
わく
我のまめしふも　西　ちうろ
はるかろ抱とをさうる
　　　　　　　　　　　　　　
するバ此やうり入ぬとらひきをいりかかる中記
　　孟抱胡之師より初の森ねの方にきまんへ芳しと
花のかげの猿ねよりいまぞやらうしきま
あべきぞ作やとい又ハ松よおさきれりハあぐ
　　　　　　　　　　　　　　お夕貌の胡
なる花ハゆきもやしとあめ猪中ねハらうわ
　　　　お去べき老人ぞ
のいらよねさのけさやをち夕前あれどいさ
　　　　　　　　　　　孟夕貌の
　ま今梅貝の宮をぞ　　　内く此婦座の中の□ん
海の此ふさ海よめでてささまらうもあり
みけしき
えてあんとこうろけいれてとあれバう
　　　　　　　　細
志ろやまとくぞうのこえ。此とく見へ為うと
　　　　夕貌之
我らし猪するとけり初いくいつしくうぞ見ゑ
　　　　孟
えすひりんりし。女ハいくしきうしとわひ志や
　　　雲お房く
てあり猪もわびはまされりの見猪ハあぐ
あらぬ前るくめやすし世のつき此へしみぞ
　　細夕貌の胡

こゝも母のあまりにも出ぬね
へさるに
うちらのとこそ
は六帖よ河口の関とある
須まされどもいそぐ我は
ねや忍びくよ河河口
偕すゑ川口のせきと為る
ぐるやまあれども心ぞく
まれわやせきのある
ぐさ 三光院説 川口開く候
勝し 花 弁のおおれり
ぐさとそひし時夕霧
の我ハ河口の前と思苦
よそでひしあわしと女
よ説路よ出ぐるしと出
さら八関のあるぐきハり
て まりりしかども母
び はハてろをりようて
いろど出やさらんとり

なりあぐりつゝあとゝらかりてぐうそうくま 益我一んとて法出しきんでとさそ
でも母がしゆうさうかれ義を忘ぬ路ハねもさ 今の滝ゆうしハありされと
まさとあるつざられとくうしとせのし 路ハおおれ乃 益夕忘音霊
まそくといぐしつゝあしかさのどととしさへるく やまのまって
とどめ路つやいてきぬしうるあくぐれぐらの 細いとくしくてさう人あらしとし 女路
ともそぐしいへ母しらつれとののへるぐれ
女いとてよてしと出がして
雲居 わさきぬとひさしけり河ぐらえいう 叙 雲居局の細こうち云ゝ
ぐめらし関のあしらさわさりしの路 細太やう為とわわろし
さ夜いとこめさそうすしらりくるひて 叙 夕霧の云ゝ
夕 なりいまろくさその関と川くらのあく
くさよのとハ出あとさしるん年月のつりいそ

よそひまてるしらふくるあれだ女いひて出ぐるしと出りつるしとく 哉 花の説 雲居の…
りけて八面申しさく
あさきぬと 嘆 雲井局の前く後さんとりん 叙の方とあさくとひかしまかし 下界師 彼
又秀の関の其頭ハ思ふくちれてりしども母ひくらは心をよりいうらとのみを川口
のとしをさしいくはりしりつれとのさせへるとどめて川口の関と
ひろるめのわりしぞやとくいふハ我父ハ隠る我ろの上の世ハ出のとと
忠ろハ彼レ女きして知路しらハ路よ我しらぬ封色と思ふされしるをぐれハ我父の
ゐをいひるかしまかハいりどとしらめくらんしと前よ列ふも後やりしとい
のりにりろ 細くさきの関奥列し菊多剌関く倍よくさきの関とらふさぐ
同録 黒酒 師 此歌前の心ハ女君の我父の後さんをいひるかしなろとりとる
ぐふくことくりつゝあるくまいとに内府のちかりまてゝるハ菊田の世をされ
あり しを河口の関のちれども出そ我度ねとしふ家に後さるるぐるり
と知るせいふべさるすあそれりさらんとしされど次の細かも抱あらしむなどいへ
年月のつりりも 花も夕霧の細く年月つれるりし抱せいふのつりりも當
なりうつやまりとしと
あり

わりしそふぞ 花 わすしそそば
退おの心くし 益夕の子納出
東面ふし
ねくされのあさらか 河六帖 ねく

いくさりくるやまりきさよ 抱出がしむべく 思 叙
の流粋の余気よそつけて夕霧の名やしさと
ひようしらてぐるしげよりてゝすむしおく
なも志てしもどう母なりひらくさてしまぐ 叙 内大臣細し
心と出ぐく志てらぐ母なりあさいうれとひらぐ 叙 作ふへての任角とされあらうく
め路それどあうしよろてぐ。ぞ いでゝ路わくされ 紫夕霧の名乃之

これの名れの花秋害に
おもうくしつくえしね君
うれ
まくるは　細　思ひまいし
時よりも今日ハまくをも
うすもしるひよくなし
あまえし

まくいとくたひまてかう身
の程とよ　昔より六位
おくせあかしいひこし内
見つらは今也うされても
うくつれなきに思わく
いくどひまてうき心の
わびしく
いふ今は又さし夕べきも
師又さしかべさもたひ
まこそやさむていらる
めぐら細しりくてしもわ
若男の程とはなひ給て
年比も見へし今と怯の

のあさがほ　こゝろひおもとうし。此文ハ取れ
志のびさりつう悔のこゝろづつひふそしわ
若とおもくそよいえ思ふし給さぬと。稲ひひ　曉　雲井居
とぬいそりしくあまみとまうふく
ぶるうさぐうつきさじうあまよ。此もくいてうう
て給ぞいうしうるきや。うつさせきりつ　細　夕顔の父の位し
しゆもとうし
此くしさよ。おもくいとぞ思ゆふして身のか
どとうえぬちわまよきさしやべうも

夕顔
とりむよ志のびよおうりてもしおもし
ふおかうく納のありてとうといてあれい　抄　夕顔の父の
細　内大臣と頭中将を
たちおとくそ。自とひうしくもうさぐる
れはをうされめどの給とびゝしのあうう　花　此日比の
ふねとそ
とのしれるしいとハぞてさりくけるれへく

はそやく　わべきもやくらうらうとされいかくあらはれて又中やうぞのんうつくし
うらむまよ　細　今よりハ思ひふみなさましとし　花　此年月ハ思ひよ納と志からしうども
あまりよりしこまされてうそけハ源の常もかくうこしと人おもとめそとうと　作らハ
今よりハ人かもそぐうつましさこそ　作り
此思ひりしとしぞさむかけれハ　抄　雲井居の在中思へと給ハ志あふて女かをよ大臣を死
かせハ孫あ来ねぐもをんを案して我君へ給すべし

右近のもくうわうか人
右も近ね監ハ女ぞ叙爵
せざるとえんぜらくとうづく
曉　夕顔右中将し、右近ね
監うべき説

おしやうそ。さるも世がりしたらかめべきこと
るれハさうりあまぬ。此彼のろくるぞてさしぬ
さ海ますう。中将おりしさ海よりてまし　頭中将と
絡つるよひきうりしてうくろへありこし
此つりひのあハ世ありくるなと人ぞしくいうろ
まあめり。志るとのぞうるう人のむつまし　抄　源氏志政右近に
おしつりひ絡なりうり。云常の世ちぐもうく
ときうしめてぞり。霊ねつるようりもひ　抄　夕顔死し
ありそひく来りまへれバいとらまわり絡　源の乙

さうしさ人も女の
孟人ハ少女事よんこさへて
哥を夕のうく咲出給
とて源の詞也

まくしきんさら々
お女房とおまつりてかご
わくすさんもどうしきよ
あしらり

て。けさいりよふとなどりの一つやさしし
細 源の詞也
き人も女のすぢみはこゝろへわかる
を。人まうつゝいふらいてれをぐく
もぐされさあんもとし人をめけうり
けられらろ々ゆかしくさふ出ちでのにれをさそし
孟 内府の心の内ろきたる也 源の詞也
のおもちりすくてゝおすらりるくろゆ出れ給
めらと世人もいひいづらしとわらんやさらし
孟 夕の方ろんをろうしの本意と源の意詞也
とても口がうけ心がいよいいとどうりし
てすさぐるさんまゝ人あどりしし給みさ
孟 源の内府のことの事也
こそおいしらよ知りさかわんをさそれしこと
嘩 女さしきゝ師説にてわかき也
もれども君のひんをおくうしりのへろとわ
かさく人あてふくさ所つさするく人ゝし

ほよくもえくまで
師 夕霧十九歳源氏八卅
九歳也されども源氏ある
くて源氏并のことと也

下みぞわ 類字源語抄に下
まる深注にかくのこゝろさき
く下みろくさみどゝくる
もおるかたくるへさわ
心ろさおやのたすてきき
花の本は本ハてのおやと
ありてらうしあきてきに

孟 内大臣と夕霧
あどれいのあらしへきとて。あふこうらあと
とも也と源のわかきとし
めやすさ流あそらひと知りてられよりしとと
えぢそすうしげとのうとゞらつとそく給源
源氏と夕霧とと
うれしふそく八知るが日をまる何しもりさう
とゑ面ろと。知れへりて八き面くおれめぐく
源氏之
さしこし給へり知らごいうまさされるなやし
細 玉蔓に源氏をろうさ也
細 夕のことすさき 花 落葉也
あろうけぞのりしろさうらがりんけぞや
よつやくとすさらとなりて初つき
夕霧
あも。もそよう面めらしうかりしますの宰
花 ところ花也
細 ゝさゝ也
ねもいすうし々あらさ流るそしまて一み
河 因幸らのおや
めのこうろしまでおれんしおろさおやのおか
うしき給ミあへるこしとろへかそそしゑへよ

てハ白くさくはお花多
[illegible]のおやとあり師
説の[illegible]白きあやとあり
て[illegible]のおや[illegible]本とあり
めす丁子染とて又白きお
やと見不審云々愚案一
説云丁子染ハ[illegible]
白き綾ハ[illegible]
らん仏みて　細　おこなひさ
玉　三光賜入花園史　仁明兼
和七年四月八日請傳灯
大法師位静安於清涼
殿始行灌仏事　昔
[illegible]説寺よ[illegible]仏生
会ハ推古天皇[illegible]
[illegible]灌仏とて内裏并
諸親王大臣家まで[illegible]
[illegible]ハ兼和七年より
始まるとし
れ[illegible]出
ふせ[illegible]
親王大臣以下布施を
裏まり[illegible]
師[illegible]中の灌仏よ[illegible]

仏生会 師[illegible]

[illegible]らん仏みて[illegible]師を[illegible]
[illegible]られて[illegible]
べり[illegible]
ぞ[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]女房の布施ども[illegible]
[illegible]風流[illegible]
[illegible]盤[illegible]
[illegible]童女[illegible]
[illegible]布施[illegible]
[illegible]
[illegible]夕霧の一方[illegible]
[illegible]
[illegible]夕霧の[illegible]
[illegible]師[illegible]
雲井の雁を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]水浅不通[illegible]
もあり

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

六条院の御ゆかしき紀氏よりの日の
紀内氏の姫君の事又へ
きりたまひて
一云の上くおほてよ　細葉上
く此所は葉上の栄花乃
盛之為業もりいとよりす
のあらまり給とあれそ
王儀婦の神雷袖ども
給ひ物とまうやさて御
出ともなさ物みなられ
うちそあらはしまする
ありて御形をも六ち非紋
八組ともやとのおさ
おさ〳〵もとよりちあり
とぞ

さきしらあしんおざらのか方みなどもうらう
うさそうれしとさつさらし給ひけりうくて
六条院のれいのざされ世よ回のおどろかりけり。
しいのうへこゝあれはまうでありふとして生いの
れうさがしらいざさらひさらしまへでおほうくさ
しとひきつゞきてしやましきをそへて。
られとくしものまてかゝうきおどるま
とおくもそれ車女ともありそて。ほざんむど
もらぶくあき人へうぞ出かくとおくるぞ
すそぎしらうきとけそひしくるありけり
の白おつきらよまうでまてのへきやは細法
らんむてべきされきじきるよおそらし出かけなさく

れうさくの女房ともの車列
つきて　孟法をしおほの細
よ強とく使ひあらぬと
あればはけしくとあるは
葉上と内の姫君ともを
やる也　師田

時のまゝなりおほどり　孟氏
のおとど今はおぼろきけれ
心をそそをおいまゝめ
御くるく
けさまゆやうくと
細葵上の事又ばかり是て
ののひきあればは是るれ
むことし給ふく
その給ふのまひ　師物のけ
のうみど以て　孟源の心
よそれは是不吉されば
ののひさし給ふ
文八名のしびるまさ　細
く中文に立まひて　秋好

の女ぐるまどものくるまひきつゞきて。はかなき
とかくしめらるぐらいらせ
はしられと見もわかうたちさわぐほどのこと
けいづかたにも。わかきものども中ぐるまの
さぶらひの車をとしきけれどもまゐ
こし出そはなはだらるる
わかこともはらちらうし
出やうゝるうでかりまさ
の給をらで斎宮の人々
うくこく人々そぞうまなるの
そやへあかるびなるすらでてか

ひがさ人とあらあらひでも
みくひあらりとゝん
くらべてけし定めなき世なれ
どそれ彼すもやいますまして
いかなるさりの世を
愚案 彼此貞和甚上乃
此ままのありさまを云ふ
まつげらくもそ盛衰
定めなき世なれば源氏
木只と此人のまくなる
世よ世あわしさるなきを
ものよりせてさ海
おしけれど源氏の此よ
のこりあえん子孫のすれ
みよととえきらん世の
ひくひとさんとは世にと
ふまくにもえしあらね
りしを紫上よりなりまふ
こゝにて紫上も只との此
威勢にまかせて情なき
ろすたあふ見るの徳めし
盃上主ア源の摂家

ゆりへいいとらて衰なれどもぐくいとさぐめ
あき世なれどこそ何ずまとふふまりまて
いけるがりの世をすぐさ海おしなれど
栄の
のこり給ひんすむの世なまどの、らうしへる
さゆとろへあとどもさんとひとくらうれども
此源摂家八葉上の摂家よ源のかハリてし
とらうきらへますて王生ありあどもけれ
じきうよまりつどいまくれば
細 源の摂政摂家く
伯木し
のね近来づくさの使ハ戦中ねなりあるの
内大臣の亭に
大殿まで出づ何のりぞ人つ
奸 惟光が娘夕霧のえらひまえん 師 奈の勅使に内侍殿とそのあ
なるさらへのあらけをつひへるか
源氏の天下をまくに生すハ世なれハ惟光盛と
ゞとしふるく内書ごえしらりて
なめらうり
おもしろらも、れとあつく

摂家より 摂政摂家へ出かけり
近来つくさの使ハ 元服の祭に春日祭の使、近衛づくさと聞らくハ東様を聞らく
あく、華人陪従ハ近来づくさの殺官さまよそえ、使の出立る又えりぶりの様くの
儀式ありけん 嗟 近此までも近来使ハ伯つぼ髪中ね代うがりの車あぞまみで
あつま様ひと見まうあり
出し何不より 師 柳木以中ねそ祭の使うれども内大臣の亭より出立く、それより上達
アおりてそれよりすぐに此源の摂政摂家へ来りまへて

さらでだ 細 右内侍のん
あり夕霧雲井房子定
れりるし 細 右まく見るを
候ふるや
どりりるる何くいらくえる
あり 盃 夕霧の名の不案
なく候よりやすふのかずし
といふとのふん一蓋とて

きまくく此ころつよせいとめぐくう 奸 夕霧ぞ 掌侍
内侍のまけ出立をちらひあまし
の中ねいぞくらちの所のまさへかふまへの 夕霧文でなや
奸 夕霧前典侍母のよう中のまし
しらとしけびもあそれなからし給は中えれ
盃 房のまの右内侍 和田出るて
ぐらく色んどしなささくよまぐさの給ね
なをとどまずしにらもひきへ
夕霧
かくよるやなそのくごうしまろうくらか
くいまぐもうめのよ出らられおさましとある 右内侍
ききあるへ 細 ままと四のまよまぶれて
とあらもぐしかなれぬだつらたいくやひ

そそやハおそるゝものゝをとをさぐる 師 そよめく
ことばとりやといふにもお
なじきさうなり
あきしても 細 ことわり
おもしろくこゝろにつけ
思しく夕霧の及第の
人なれハなり 師 在内侍
春のはじめにしてもなくれ
とくらへのいふも學を
好みてよくおさむるの称
なるべし故ハ桂をおりし
夕霧こそ知るべく夕乳と
み學種まつりを称わる
桂折桂ハ夕霧のりし文
章生になりたるをいふ
く、晉書ニ郄詵ノ曰臣
對策為ニ天下第一ニ猶ニ桂
林一枝ニ崑山片玉ノ今謂シ
課試及第之事ニ作用
也。拾遺雑上菅原大臣
かうぶりし侍りける夜母
のよみ侍りける 久方の月
の桂もをるばかり家の風をもふかせてしがな

くまわそうじ
ろんじて物さはがしく車よりの得どもまれど
在内侍
さぎしてもつけさしうさうの名へりて
なおりし人やまさりんそろどもすこしてへと
師 傅士なしでハ六位じとく
わくらきれんかれどもわくらきいへ人とか
細 夕霧の心をとりて
おぼえ給このうち給しぞそぞろなれども なりしひ
細 業上そのハおきて
まじれたまくさうそはまりよいかのくさそ
おほのゝ業上久しく思ふ
ひまへきをつきよわがくしくへ見そひ
細 姫君をも
うかうひ給ひずうらつかりまらのれくらしめ
孟 業上も姫君ハ実母なれバ
こともえへりしと物頃をぞ人をつかふあう
細 姫君をて
べきこ のくへぞくつきそとかく絡をとりの
人もこえしとそひるけりうらん。このれこて
孟 姫君維君此
分まをひまうきと業のんゆうかよゆうか
わかも今はやりくぬがいつもくえよぬが

ともうかせてしげるみ
このれんぐと 細 姫君
業上もをりにちひ
まうてに不孫ハ作りして
も識の母をいはらしくと
ひて但こまうべらそとく
えそうふつうの心てらう
そうりあるを 河 え及ぶす
りんをてそくのかわ那り
の家位へをもあ作しぬ間
まえくねまでもさひ
ゆりてせんこそあろうきさ
とらく不足のりしくか付
乳母ながらハ上すぬのゝか
ええ及ぶまじききうしのぬ
とすらん

しちらんはくらんどの心をそれおうんもあいな
孟 業上の源への見に 姫上を姫
しとおりひなりめでこのおかりよそへなり
孟 姫君の初雑とし
えはうりあへいかいしおえりなりをけしもうさるそ
めざましよそふしぬ人へそもわろくし
きのそぞをよかかれいめのとらふかまぞをと
そをとしぬとの心いてらうがきりあわつとそ
孟 業八第二ハさうすいりそ
づりしてえいしもそふくいざしんか
細 姫君を久しくなく
どらえろやもうべくとこそしきまへいかと
のうくのまふぬり源のとのすそ
おうし業上
うくぬりしんかりれしと業してさすんとあ
細 姫君ハ源のの後ふて
すまふとうもりらくへの後なれそいふしく
おう姫上の心
られしくあかていううひ将らんらして人
おう姫君上の月心しまかな
のさうそくるよそのことらと。宿へいとふさ

う縁らの此姫ハさきこえさせつ
んの心　お実母わりの上
て此れより姫君をえさせ
ゑくるし母の尼ハいひくゝまか
従者みなの心ほどえさせ
るもあるまじきをいふ
しくてうとくとて
立て車みる　兎で少夜て
姫君の車のするあとに紫上
ハ同車にて来向わたくしまゐ
羽よ紫上の輦ゆゑまれ
のふうとようお此服て
紫上ハ姫君と同車なり
まゐる上ハあらずり
あるとなぶらく来人
ハ姫君の此ふあいうとて
承ハ御方ハ来りなく
河上ハ女房も輦を
ゆうさまね牛ハ行らお
すて道の程ハ九丁とさ
せてまうりなて
ほうかくみかしつかさ
師紫上のそひまうらひ

なほこの御おひさきみたてまつらむの心ふか
りける。いまひとたびみたてまつる世もやと
いのちをさへしふねくなしてねんじけるを
いかにしてかはとおもふもかなし。その夜は
上そひてまゐり給ふに。さて車にも
たちくだりあゆみなど人わろかるべきを
わがためはおもひはゞからず。たゞかく
みがきたてたてまつり給ふ玉の
きずにて。わがかくながらふるを
かつはいみじう心ぐるしうおもふ。
御まゐりのぎしき
人のめおどろくばかりの事はせじと
おぼしつゝめど。おのづから世の

とさふくし
う人ハ出ときに　師紫上あ
らし実の源子すまし
うえいうぞりまうわく
んとゆわもと
ようつうり　細紫上ハ退出
あるて此みの上うつりに来
てあって
うれえかきかうちめる
是等姫君のうく此出わる
山さ明石上の之をうら給
るも年月のかどもまき
なれとぞ於しくとひ
なかうおかんよとくえ
来せる人ハ常しさ俺て
のろうしくやわんとく

まぞあらぬや。かぎりもなくかしづき
すゑたてまつりて。上ハまことにあはれに
うつくしとおもひきこえ給ふにも。人に
ゆづるまじう。まことにかゝる事もあらまし
かばとおぼす。大臣も宰相の君も
たゞこの事ひとつをなんあかぬことかなと
おぼしける。三日をすぐしてぞ上ハまかでさせ給ふ。
たちかはりてまゐり給ふ夜。御対面あり。
かくおとなび給ふけぢめになん。年月のほども
しられ侍れば。うと〳〵しきへだては
のこるまじくやと。なつかしうのたまひて
ものがたりなどし給ふ。これもうちとけぬるはじめなめり。

りのあしくらいひとひとら
細 御息上をこよ人々と紫上
のといひあふし
そこしの　細 源の方く
の流車みと紫上をも
まきしまやうにしもる
きたりそし

流るのゆ 細 紫上のみや
し花香 姫君の流るを
ありめる
女院の御ありさまことるね
明 紫上の身女院とは大うさ
のすとぞいふし 紫上輩
ゆかせ給て退出しの義式
とくんは女院なるのことし

ちいひきうけつひるなど、もじへしそてしめずらし
志うろ給ひてしけるうちにうちたり給ひ
しらせぐてよめぐらしくこそ　そこ
らの中みもとくれうれにうろさしうそ
すくひたすきさ夜よさこまり給ひうもいと
こうりといひ志ゝしうてよりうちらくくうち
すうひゆうゆり給ひとかりをりやゝしといりの
うしいつぐ給うさしけのいとこともまうゝされ
くれいて車かどにゆかれまて女院のゝあり
さ夜ふけとるゝねよといひくうふうけまさす
がたう男のかりとたらいとう川くげよひ
かなのやうるうれいそさ夜と夢のそくらしそ

抄 おまえわたくしよ見ゆと
男のいくなうしといふか
てつれバえいたらる夜
とされいるるのかたらんさ
我と又男をいひ地とて
御息上のこと
ひら川柳とも 細 かれしまま
さきもしハひら川まで見う
まぬ柳ハ源ありうり
師 ひら川柳と見てゐとハ
かれしさのことぞすくれ
さるとのなるり、御息のを
さ夜ふくさ男といひて
つらいのちも 姫君よ別
ていけうひるさきうつ
男ともひ扇しつつ今の
今つくえそうりてハ相よ
くせゆかしくていひく
しさうん晴くなきまま

ことまうも源のことゞまうしぬとひら川柳と
ぞえてきうもそ、年ばかり川よなげさし
つさ夜ぐらうさ男といひてつらいのちも
のべやりしうそれぐあうさまよつけくまうと
よすしよしの姉もとかうすしんといまう、
といふさ夜よつしづくさそしてらうそよゞぬ
こしろこゆきしくなさき人のらくしうさな
まばたゞさのますを對しうちぐめなずくく
すうぬれあうさ夜うてしたうをいえもわうさ
れうちよいとらくうしうはりひくうてきこう。
いどもさまくるれけるぐくの人すどはこの母
君のうてまふうひかふやとこさずるいひかし

それよけくるゝくもあくぞ
孟小侍ようつくらし師の
君上のそひまふをそねむ
人ハ癖よつひるせど岨も
上のちゝさのちるげり
まぐひるきさまよりて癖
まひるのをとてもけさる
べきまわるぞとゝを深
の綱まえくくら
岩上人命くるもめうらしさ
ゆしらしで雨まで
恩棄明之上のちまぐのあ
らわお利しさゆへ岩上人
まぐまる此姫君の清らさを
風隙のいちるで雨まで作
ふん／＼ふもんをうける
どまそうとゝ
まうちそで一きまく抱京れ
を　明之の御と宰上のう
ちらけまふしそんを申
してましる抱まれさる
ふまさくわおのつくりつく
ぬ明之上の守りさ妹とと

あらすれどもそれよけくるゝくもあくぞ、
いまわりしくおもひへすさしとゞまらぬも
いくすゑろよくりしあつはげりひをつる
るさこともよつけくもあくまがりくるそる
しくこともまれど岩上人命くどもゆづりさい
どゝ雨まてらうくまさふ給へくも心を
付けるよ女房のかうい御よそへよしく
とのへまゝいちうもさうぐさ白ゆう
ゆはまうゆゝ給ハ申しひわまりくう
らとけしもきりそしすさゞ抱まれても、
あまつゝうくざきそあそとこゝ宰な
くわやちゃあく御行しさん命のれあちの御
らうかぞくへうまり。おもしくもあぐらぞのまゝ孟体
仮ゞらくれ世のごろさえしおはりつゞ代よ
いのゝひわうさ御よそすらすまそぞ
うしるすれど世まうことさまやうゝてこそ
しりつら宰おの君もおりひまくかゝやすさ
ふ御よ志川まら給めれバ清心ゆらるとそ
ませ。今ハそいともよげうんとおりそばしかも女
いのよ乃清わりさ御のことそろくうまりも
中ぞおつしやせどとあうゆゝぬ清つくをよ
まそう。このれりさみとゝ世よまゝらるれうらかや
ゞ御ゑは、まり川ゐさくしてあふへうれいバさり
とくさとおわりゆつりらく夜の清りさの時ぐ

今ハおひもとけうへ
お源氏三位官をやめて
陽台なぐら上卿せ人の清へ車
し。功成名遂身退の心
夜の清りさのとゝへくよ
孟君ちつ里のぐらりさき
人なゞゝ是も夕霧のより

ますかゞみの意

太上天皇よあまくしらうれ給
位 細 花鳥の義に云 帝の御位
位よつきたる帝の御位
をさりてのち太上天皇の号
ありけるを太上天皇とはきこ
ゆるなり太上天皇は位をさり給へる人
の院号なり 教明
執政のかみ一条院と号
せしめたまへる例なきにあらず
し 但太上天皇を号せ
ねどゝりて院司年
官年爵封戸なとい
太上天皇になずらへて
給はりて准后の例に擬せ給ふ

よそふすやうに給ふさも寧ねの絶しまく
そこしこれらくようなめさうしくて
世わたりゆくあけんとしまそてわかるの
きこゆれどもゝれ世のしもゆかりけれそ
しめすりて御わきさあるゝ世のいとそさなり
その秋太上天皇よあまくしられ給て給
くらふくらしいとつゝきくわりありされ
そひ給らくらひくま世のれいよるそねこし
うけきどあ紙あつらしらつる昔の例を
あくらめて院司とさしあてあうさ給いつ
くくもうそひこまへいまりあきへき
しとうんさとそゞくりいわりけりらして

細 源氏明年四十の暴とく
細 年官年爵之
細 源氏此御とそても 執政の人多れつと
細 院中の義式
のこと全ときは何らの義式も厳重なるとし
細 冷泉院

事の御は太上天皇になずらへたる御ありさまの院の御門なる号
よおもふぶるより御封のありいかにも院の院号のゆゑの御封ハ下の式と定め大上
天皇の御封は法令よいまだ定められさるゆゑ京文の内の御封ハ二千戸のりし定とあるよ
のせられたり又一条院ハ長元の内の御封とを定められしにや源氏の君ハ
太政大臣より院号を賜りしより太政大臣の食封ハ封令よ三千戸のようし
小一条院の例をとて三千戸をとめたまいけるなるべしさて一条院の
御封ハ三千戸のみより多く定めて法成寺関白ハ食封ハ故て食封とかく
しらされければそれを例としより殊勝なるべし小一条院の御封のうちそ

位をあらたむるとて人家大方定べしとて
昔の例をおもしろくあて 細 ての字清濁ある濁付く太政大臣の御封よ
とく 花 政太政の二のくわり源氏ハ准后太政大臣なれハそれよ政て准后の
せさらんて太上天皇の太上天皇の昔の例をおもしろくあらずとてしく

をれわるどとミうとハ勢ありして世中とそ
りて位をゆづり給ひなるらしとわれん
給ふのにるけるさてはれかも内大臣あかり給
く寧ねは中将中納言よおもふるにはかりかはる
びよ知給ひいひりのゝてまいらのまる

細 年爵年官のこと 位ハ
細 位まく
細 五夕あまた
細 内裏のことを奏する職事をいふ
細 内大臣あかり給ひ

かうぶりそしめく、あいぬしくあさきを、あり
じの中もうらく人々よとされぬとさまし
さるやうの人々よりもんしとまかりしを女房達
あいよのめのとし、六位すくせとつぶやき
ねのゝし、よのをりをりにおぼし出ければ、き
くのいとおもしろくてうつろひたるを給
はせて
あさみどりわかばの菊を露にても
こき紫の色とかけきや
からかりしをりの一ことこそ忘られね
とていとあざやかにほゝゑみて給へり

大輔乳母
ふたばよりなだゝるそのゝきくなれば
あさき色わく露もなかりき
いかに心をかせ給へりけるにかと
いとなれてくるしがる

あさみどり 細 浅みどり
六位をいふ。こゝに濃紫に三位之、紅梅の衣をも着る。延喜式によれば浅緑は七位の衣の色也と云、位によりて縫る色也。又二位三位は浅紫なるをこゝに紫といへり。六位の袍の色に似たる事をいへり。大織冠にも見えて、しき大臣の袍と同じ色にて
おなじ紫と浅き紫と後には紫の中に三位の時紫の衣をきさせて、此代のしるしのまゝの衣しうらかりて後撰の奇ありて云ふ
二葉より 細 二葉は此は
よ云ての宮の名をいふ。花 後撰七 秋
そふなる花とつゝめどもあらはれて
花のありとやいて世の人も
今集 見たる名を見て
ころ浅き名はあさき色
どもて
せんさいとも
童雅盡成人園林半喬 細 樂天句
木ともいふがごとし
ひとしきにまづきさ
盆にあらくて人しく一色に
そくとおもひにしのつの

ありくつとんゆくとしうろうしさうら。あらし紀
夕霧の所どと。りと前なうあうてあさまし
なるし世の泪をこれさの物語ありし給ふ
哀しとさしもむかし人の老ひとりそらしもたえ
つれ〳〵なるをハいかゞしいぶ。かゝるのきま
ぞちらしどぞ〳〵いぐまうつひけり
なごりの名のあ川まりていたられ
とゆひのてり。ゆとこ君
夕霧 すれ。君のりあるじとりん人のゆくゑそ
らうや殿どのましみ。女君
雲井 なう へいひうそとずつねてたうるな
やまらいう おのれ なぎ のまいへ。

なれきそハ若ゆのあるし
細水こえわさにたれとも
師尼し人とハ大宮のこと。
洛長法の林園前総えま
しろハおり得ねといふと
わりゆすうち忘のりとうろ
なとハんけさえもし
細大宮のおいのかれかも
うくし。盃いうくうのゆる

なまなどのうく。おうとかれ
ることハ忌こ夕霧とおハる
ミまあまとやまりて。
いうしるい小井し所石
なうてそ不変り御を
昔おそうしまへし
所藤役大臣ゆの姫そ
ぜうまくらくねきも

女そ又からの 雲居
のかうろそく れらそれも
みくそひもあのもし夕霧
ハうしぶ人もおく名
なもし

くらうりゆまて給けりと。紅梅の名なまお
どろきれく。わさうりきつう。むりしゆきし
まいしはおるもと給ひみも。たまく〳〵ろ
こしうつくあうりくいとおとそうしくるを
ゆるまくるを御。誉やりるうとぞる給ひつ
じてもいと悔あそれたのゆかりさう。中納言
をなしさ。よる。りかすうしあのそいひを
ども川ゆんてよの給ひおゆ月しく
う川てげなうはあちひるれと。女ハゆるこ
くるうう。いのさひもるうごりゆうしんを
そしまつら郎と。ハこえもあくさうりくう
まおりかまあらく人ゞとらし。姫ま人へよ一所なそ

このあとの作 上の二首
哀傷の前あれど…
くして…

その…の
…のひつれし
く前を…
人…の…
…老…
…の…
…ひつ…
二…
されども…
…夕…雲…
…
…

神無月…
六条院…
村上天皇康保二年十月廿三日朱雀院に…
幸の例と…
…海…
細…例…
…

前のつぎの…
もも康保二年の御葬に
左右近衛将監以下近
衛以上各廿人…あるを
…例
…の近衛 師将監将曹
府生等…
…日左近の…
…の…人…

神さびて…も…しいかに…
ても…めぐり…
…
…
…のもとも…
…松も…
…
れ…
いつか…
…を松の…
のちの…
…
くもりとも…神無月の…
の…よ六条院より幸ありし…
…
よ朱雀院の…
…
…
…
…
…
…
…月の…
…

みちのく
あとりあし 花遊所のうへの
布草に縄をとられ
こどこえ

御づし所 細 御厨子(ヅシ)所から
上の御膳をつかさどる所、
しかれにせられしう
鵜飼かゝへし 御厨子
所別當一人 膳部(カシハデ)預(アヅカル)ニ 鵜
口二人 鵜飼四人 網代等
ヲ 領ス

鵜のうひをとめしむかへて
禁中のうへ所のうへは
六条殿の鵜飼をめしつく
仕ひせまつりし
みずのほまん お寺に枝を
わきそ木の葉のうちふいて
そなものそぼぬれ 脈絡
路中文献にて位あくうるも
物の所ともあまるし

このえん殿よりうつりおはしませりけるのほどそ
ぞまさしく殿にわたらせ給ひて 細 軟障(ぜじやう)をまうけ
うちくまなく遊ばしたまひていたらせて
く見れことをまつりひがしの池に舟どもう
けてうかべそえんのうらひの鵜飼
ひとめしけるぐく鵜どもありそ
ちいさきみれどもひとりけぎようのいとゝ
あすけましくずさまを給ひそらのけうかりに
るんおのまみぢかいづことやうくゆく
のちうくいんとしたりを中のらうのぞどく
づ中門をひらきそそのくずくて
かしんぎをせまいの御座ふかく

をんじありて 細 あめあし
の座をりさげうると圍座
に遊ぶこととさせかへし所に
代に太上天皇とそまりく
又帝の父ぞなくうかゞ陛下
にあれにて
うしろありゆやくしさを
細 朝覲行幸の作法かも
ありしさことあり花朝
覲行幸にハ帛給を賜
て上皇を拝し給ふ
あらし所朝覲とハ天子
の父上に申す名にし
池のうへれの御持
花御記ニ延喜八年五月
廿八日従神泉苑西掖
門入御、東披殿尤大臣作テ
令鵜捕池魚尤衛門督清
経朝臣率宸捕得魚奏
覧則御前料理供膳餘
給侍臣以下畧
鷹人所のまうしひ 所 鷹
飼人鷹人所の別當近
衛の随身木工鷹飼に補

の御座ところにわたらせましまして
鵜飼しめでてらしくされども
つかうりやくしさとつかうして
もゝたしとどうむかがしけり池の
ねとり鷹人所のさうじへの所かまいりつう
まいりまうらひしつぐひをなのとげ
てえん殿のの人りしうらぶ鷹かの人
しのひぐりさよひぎをつうそ
あわさいしぶ地かをくとしのそて
のにまえて庭よりまうるしの
めづらきさ海につるのゝしだとく
くうまつるをまつうされれ思ひ

ともなひとみえし見花香一之巻二伺擬鳥奏階下事延喜九年十月十八日権中納言藤
原朝臣着小鳥於萩枝立階前奏之無本氏有進御贄
香一つびとなのあげさゝげて　おんのこけハ友近か物形申　問此作法ことまれ給
か又鶴ハたよわり鷹ならあゝなや一線若しハこそまれかは法あり養者公卿
あしにてもまてすあり鶴鷹の勝劣も何よりもし鳥ハ雨前の池すてしろれろ
て此時ハ鶴と誉入ぜらるしも文常法ハ遅速するもつべきやや
ここさちまさかしるしの雨あうけ　古多弥の寄ある但あ名あるハ王の一辰献物てすを
そろうや新櫃　菓物ちど時しきぎ画よ禽し絵らく　諸物此まどとの鳥

こゝろ経よぐく雨の人めすけざしのおぶくありハ
わしもとおまめしきほじしまえ席上のわくゝへ
すひつくゆろう朱雀院の紅葉の賀ろ例
のむろしのがしむろの紫土息といふとぬう
すろ消しよ時消きせとのかまとのすゞつれ
なるをちらよおりしろうまのふくのそりとれ
そ物ゝうて経る時消さ盛くるありてぶうる
経めりしの流さいしどゆしとおてる海波の

冬まさう海ぞさの菊も
細ゑさるびしるすとも
孟太政大臣often賀の
時のうしおゑまさるは
太上天皇太政大臣みよま
にまりめうちすとそなひて
くわ西へうとけまふ
ちうえし

紫の雲よまする
紀らじの卒くの前之雲
の雲ハ菊のむらくうな
よせあり文菊ハ卑よ似
よんバあらく收世の星
とこあうハ海よ慶雲
寿星の化しさく慶雲とハ
老元の時の嘉瑞之寿星く
徳星ともいふる天代明
時の嘉瑞之見天異記
花久うさの雲の上まそさ

おりあがりし川
冬まさろまぢさの菊をおりくよ袍ち
のろし秋さこあくし中ぐぐぞのおりりハ卒
舞ようちうびゆうし経しぞよれとも人
みは思ゞれさすへあ男みがくきをこのろ
おろくこよみりけり経ぞしぞろ時女お
星あうがみり
紫の雲よまぢくろきくの菊よさろくさ
このおりうとそぞ時こそまされとさこ
経夕風吹しくりみむのゑてこゝろうすゞ
みしさえそしきうわざ威のひへこしゆがら
庭の面よくうちおりしきまちうさぐの。やん

ことハ天河ならとそあやまりくれけ
河をぞありけれ 細 川ハ銀河つらく秋ときそ河をそへたり菊の花のうへにいかゞぞされば
あまきあるらくえらく流る
ゝとと
又花 細 紅葉ゑまへて 白様ハ二色あり。
あるきさハ青きあるきさへ
赤きもあまたにつるもを
いつくもらま比君をと云
ゐりてらくえぬしうし。
こうまハ錦童の装
束をとらりえハ赤をよ
まもをきうの下に紫衣き
青き衣にえひきめの下の
さえこ紅の錦みすれの
まるゝひハ赤色衣ハ青衣
とまもえ由来の色にを
みんねば海をす秀楽あ
伝はうやまりえ
例のうちはひえびうの
としさを 河 錦童の袍之
時 ひとゝいえ天冠をけしかて

ごしるきさかはのこれおもしろくおもきさあらね 異ニ青色赤色通用
の様と又色別ニ不見様也
むらつらくこともてらうえびの深きで○の
ごし。例のえづつらにひさいろくの気色(けしき)
とそえ。そびつえ地ともどかのうに錦
細 小楽之
て紅葉のうげらえあとしの陽と日のくろ
おもいてかしけるらぐ取るもどかろく 惜
そくハをみすふえのにれあそびらびまりて御む
のつりさ院にどくしもかめたす。他のけりをらる
あ御どうにお光にされれこ光まかれけりぐ
どの法しのうらみて糸も朱雀院ハい
とめつらしく哀にそえてしめを

うらかえさず総角を姿してそるゝ 異記
楽座のみしげらくしくへきとど 花 楽座の舞台に及ぶまゝそれハ又皺皺となる
し乱声などあれハせらつくしきなと云り。
みんのつきさの 細 楽器をあげる女房なり。女司の図書寮 河 図書寮のうちくし旧記ニ以書司
郡女官召楽器之由見てありゆ。累代の楽器を納し宅 師 書司にハ和琴をおつる
さどうし。常多きと絵会等ニ出えて見
さどの法し 細 和琴なり。河 宇多法師 和琴の名物之。以檜作之一条院出時内裏焼亡
に時焼失すく。師 うどの法しなど累代の物乃こえらくねどあされは実みがとし
つろしぬ契 細 朱雀院乃
秋をとくて
法王位の事まへりうろき
ハなうらしとえ御出述
懐の心あり哉 秋をまえて
時分うらめかるなる朱雀
の巣下の細しきなれうり
ゆか里まさえりる 紅葉
え見あをえとし
うらめしけまに 河 朱雀乃
後出代まハうろ紅葉もる
ことそとも恨むせし
よのつねの紅葉とやみる
細 つりさまの紅錦まあへ
むとし 師 朱雀の法代せ
あしまひけハまのつるゝ

朱雀
秋をえて河西ちりなる里人もうろよりみるの
おもそそもめうしあしげまぞかりしうや。
とうと
蛍兵部卿
よのつねの紅葉とやみるいにしへのいにしへのにしへに
ひけ在にしきをとひあしきもとも深く
時之
らゐまへおびえのらるあそてしでひとし川
そてもひさめ 細 深きと上とひふかの
りのとえるとせ錦かゞ 泠泉院の
夕霧
をきことなりつゝ御まの

のたまふとや ハ白人とく朱雀の戦後代を早少して主権中納言く
中納言のこゝろへひまつの 紐夕霧く若き又源よくく似まかしとく困ざまのことハ若なども打あ
ふつんのと是来帝しく夕霧と似ませおまーそめでまうつれとハ実ハ帝ハ源の院よとこゝ也り
ちつしめでたうしこそしく

こゝろすゝしねこそめでたふ海しうあれ御帝と夕霧めてよ
ときみりひおしま帝ハこしろうとめぐしうさけこひや与ハ名しよをうちまくて
ん。夕霧のことくおそやりよめあつ さとまれ そひて之ん 御唱
ゐふえつくりす つら絡へいと りしゝしさ
弄臓上人舞曲と蔓を ゝげの為よ人ども 陀よそふ く在ー中ーの弁の 北本の御
く御 紅葉の院と おねのゝ思もくれより 扨さんぐべき お世よりの皇孫 ましてさくゝしうそしし
もくろ 近 うく ハ為あり

近うくひまゝり
所ハ室もゝられ右隨分
くゝひともの御ごしろき
まくとそり